
君が奏でる音をさがして

三条司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が奏でる音をさがして

【Nコード】

N1533N

【作者名】

三条司

【あらすじ】

楽器擬人化のお話です。報われない、万年脇役のヴィオラが主人公。オムニバスというか、短編形式をとっていますので、どこからでも読んでいただけます。ちょっとひねくれたクラシック楽器たちの、にくめない日常。

How do you do? (前書き)

主人公になるにはマイナー過ぎるであろう楽器、ヴィオラ。彼の初登場作品です。

How do you do?

「初めまして」

と言つて、右手を差し出すと、大抵の場合、相手に怪訝な顔をされる。

「え…」

戸惑つた表情で呟いて、相手は彼を見つめる。まるで、彼がおかしなことでも言つてしまったかのように。まるで、もう会つたことがあるかのように。

それから、相手は、彼の顔をまじまじと見る。ひとによっては、一、二歩下がつて、全身をくまなく凝視されることもある。すると、相手は決まつてこう言ふのだ。

「あ、ヴァイオリンさんかと思いました」

彼は、ぎこちなく口を笑顔の形にもつていく。頬の筋肉を故意に持ち上げて、につこりと微笑んでみせる。そんな事情などお構いなしに、相手は彼のこころにずかずかと踏み入れる。

「でも、よく見たら、ヴァイオリンさんとは似てもつかないですね」

それが、決して褒め言葉の類でないことを、幾たびもの経験の中で、彼はいやというほど認識し続けてきた。そして、それが相手の真意であることも。

「出来の悪いやつですから」

そうおどけてみせると、相手は朗らかに笑ってくれる。彼が、とても面白いことを言ったのだと、彼がとても面白いひとだと、そう伝えるために。ただ、相手は永遠に理解することはないのだ。彼が、その笑顔によって、どれだけ傷ついているかということ。

「で、あんた、誰？」

失礼な輩にいたっては、そんな言葉を初対面でつきつけられる。

これにも、精一杯の笑顔で彼は応じる。怒ることが出来ないわけではない。失礼だと思っていないわけでもない。マナーの悪いのが、見過ごされるべきだと信じているわけでもない。ただ、何故だか、初対面の相手に対して、激昂することが出来ないだけなのだ。

それを、コントラバスなんかは、

「お前の、長所だな。大事にした方が良い」
なんて言ってくれる。

同時に、ヴァイオリンあたりは、

「何故、そんな無礼な振る舞いを許すんだ？だからお前は、いつまでたつてもなめられてばかりなんだ」

などと叱りつける。

大事にするべきなのかも分からず、なめられてばかりなのも嫌なのに、彼はいつも同じことを繰り返してしまう。

メガネの縁に、無意識に手をやってから、一瞬だけ目を伏せる。それから、顔を上げたときには、目一杯の笑顔を見せる。

「あ、知らなくても当然ですよ。あんまり、有名じゃないですから」

自己紹介をしても、その名を知られていることは少なく、名前を覚えてもらえないことだって多々ある。

「あ、大きいヴァイオリンさんだ」

などと言われると、つい、条件反射で、

「どうもー。大きいヴァイオリンです」

なんて返してしまう自分を、彼は恨めしく思う。そうやって、自虐的な言の葉を連ねる彼を、ヴァイオリンが横目で睨むのも、精神的に辛いものだ。

「まあまあ。そういうさ、自分のことを笑っちゃえるところが、ヴィーちゃんの良いところなんだから。年がら年中ぴりぴりしているヴァイオリンに、ちょこつと睨まれたからって、そう気に病むことはないと思うよ?」

というのは、ヴァイオリンのいないところでフオローをしてくれる、チェロの言葉だ。

でもさー。

ごろん、と芝生の上に仰向けになる。両腕を頭の上にして組んでから、両目を閉じた。日の光が、目を閉じていても感じられる。

風のそよぐ音を聞きながら、彼は深呼吸を繰り返した。

たしかに、名前を覚えてもらいたかったら、自分のことをネタにするようなことはやめた方が良くのかもしれないけど。なめられたくなかったら、もうちょつと他人に厳しくするべきなのかもしれないけど。ヴァイオリンと一緒にすんじゃねー、とかって、たまには叫ぶべきなのかもしれないけど。

時折吹いてくる風が、彼の赤茶けた髪を揺らす。ゆっくりと目を開ければ、錆びた鉄のようなグレーの瞳に、パステルブルーの空が映り込む。片手でメガネを取って、同じ手で折りたたんでから、もう片方で鼻の付け根をさすった。

でもなー……。

きっと、自分の生き方は不器用なんだろうと思う。でも、何故だか、それにがっかりしきれないのだ。

「でもなー……」

今度は、声に出してみた。だからといって、何かが劇的に変わるわけではない。答えの出ないことに時間を割いている自分を笑ってしまいたくなって、彼はもう一度、目を閉じてから、ふつと息を漏らした。

「おい。何をひとりで笑っている。ついに、頭がおかしくなったのか」

頭上から聞こえてきた高圧的な声に、彼は驚いて上半身を起こすと同時に丸っこい目を見開いた。

「ヴァイオリン……。どうしたんだ？」
「これ」

短い単語と共に、何かが彼の頭の上に落ちる。それが、ヴァイオリンが昨日の演奏会で着ていたシャツだと気付くのに、その時間はいくらもなかった。

「これが、どうかしたのか？」
「カフスが壊れた。直しておけ」

彼の返事すら待たずに、ヴァイオリンはきびすを返して、歩き始める。呆気にとられつつも、苦笑混じりに、遠くなっていく背中に声をかける。

「分かった！」

しゃんと伸びた背筋が、少しだけ強張ったかと思うと、ヴァイオリンがぎこちなく振り返る。眉間に皺を寄せると、ひとつ、ため息をついた。

「ヴィオラ」
「何？」

呼ばれて、彼・ヴィオラ・が答える。自然とその口元がほころんでいるのに、彼は気付いていただろうか。

「午後のリハーサル、遅れるな」
「遅れないよ」
「お前がいないと、曲がまとまらない」

早い目に着いて、用意しておけ、とヴァイオリンが言いのけて、今度こそ去っていく。

「はいはい」

聞こえていないだろうと思いつつも、律儀にヴィオラは返事をした。さきほどよりも、ずっと明るい声音で。空を見上げると、雲のたなびく様が瞳いっぱいに映る。大きく息を吸って、肺に酸素をしっかりと取り入れ、

「よっしゃ」

軽い動きで立ち上がって、うんと伸びをした。

「おれはおれ、だな」

誰にともなく呟いて、満足そうに微笑む。

壊れたカフスがぶら下がったシャツを片手に、ヴィオラが芝生を踏みしめて歩き出す。

きつと今日も、忙しくなるだろう。

コーヒーと君と笑顔（前書き）

ヴァイオリンとヴィオラのお話。

コーヒーと君と笑顔

コーヒーは豆から。きちんと手動のミルで豆を挽く。一度、電動のものを使ったら、味が違うと言われた。以来、電動のものよりもずっと手間がかかるけれど、手動のミルを使っている。慣れれば、深い色をしたコーヒー豆をがりがりと挽く音を聞いているのが心地良くなる。もしかしたら、単に順応能力が高いだけかもしれない、とはヴィオラは夢にも思わない。

挽き終わった豆を、直火式のエスプレッソメーカーに入れる。水を下に引くのを忘れずに。火にかけてからしばらくすると、しゅーしゅーと独特の音を立て始める。待つのが苦痛だと言わんばかりのそれは、まるで、「彼」を思い出させるから、ヴィオラは思わずくすりと微笑んでしまう。エスプレッソが出来上がる間に、耐熱鍋にミルクを注ぎ入れる。弱火でゆっくりと、熱すぎないように、でも芯からあたたまるように。木べらで定期的にかき混ぜて、膜が張るのも防ぐ。

彼のお気に入りのカップは、一点の曇りもない白。陶器独特の、凜としていて、それでいてぬくもりも感じさせる質感は、彼らしい好みだと思う。そこに、あたたまったミルクを入れてから、出来上がったエスプレッソをカップに。泡を立てたミルクは好みじゃないから、このまま。

「よし」

にんまりと、自分に満足気な笑みを浮かべてから、トレイにカップとソーサーをおく。部屋を出ようとしてから、はたと気付いて、トレイを慎重に持ったまま、戸棚からチョコレートの缶を取り出す。

ちゃんと、彼の名前がレベルに貼り付けられたそれには、純度の高いダークチョコレートしか入っていない。

小さな、3？四方の、スリーブにくるまれたチョコレートをソーサーの上にそつと置いてから、ヴィオラは今度こそと部屋の扉を開けた。

控え目なノック。練習中に、大きなノックでないと聞こえないだろうと思って扉を叩いたら、後でこっぴどく叱られた。騒音を誰よりも気にする彼らしいといえばそれまでだが、それにしても、自分の音を聞いているときに、ノックの音など聞こえるものなのだろうか。しかし、彼にはそういった、とんでも能力みたいなものがあるみたいなので、案外、練習中でも色んな音が聞こえているのかもしれない。

今日に限って、部屋からは彼の奏でる音が聞こえてこない。

もう一度、ノックを試みた。大きな音は立てないように、指の関節で、軽くこづくようにして扉を叩いてみるけれど、いつもならすごい勢いで開かれる扉が、いつまでたっても開かない。

「留守……？ いやいや、そんな、まさか」

そうこうしているうちに、コーヒーが冷めてしまう。もし仮に彼が留守だとしたら、このコーヒーは自分が飲めば良いだけだけれど、これをまだ彼に届けるのだとしたら、冷めたものなんて差し出したら、それこそ八つ裂きにされてしまう。あの、鋭い眼光で。

彼の、怒ったときに見せる、凍てつくような視線を思い出して、ぞつとしてしまったヴィオラは、慌ててドアノブに手をかけた。それは、かちやりと澄んだ音を立てて、すんなりと開く。

「あ、開いてる？ てことは、いるんだよね……？ えっと、じやあ、お、お邪魔します」

小声でそんなことを口にしてから、ヴィオラが部屋に入る。後ろ手に扉を閉めたところで、

「お？」

高い天井にお似合いの、細長い窓。 少しでも開いたそれから、風がそよそよとレースのカーテンを揺らしている。 そのすぐ近くに置かれた、カウチ。 渋い金色のフレームがついた猫足のそれは、上質なスウェード地に覆われていて、そこには今、彼の体軀が一枚の絵画のように横たわっていた。

「おお……」

彼との付き合いは、長い。 一緒に弾く機会だって、とても多い。 四六時中一緒にいることだって、日常茶飯事だ。 それでも、彼が休んでいる姿など、ヴィオラでさえ滅多に見たことがない。 きっと、彼と付き合いのないトランプットあたりは、彼が休むことすら知らないのではないだろうか。 それくらい、彼はワーカホリックだから。 こんなことを言うと、彼は眉間に皺を寄せるだろうけれど、彼ほど、音楽のことを常に考えている者を、ヴィオラは他に知らない。

久しぶりに、そして滅多にお目にかかれない、彼の姿を、ヴィオ

ラはまじまじと眺める。

烏の濡れ羽のように艶々と輝く髪が、額に一筋かかっている。閉じられた瞳は、同じく漆黒の睫毛に縁取られていて、流麗なライオンを描く眉も、今はじつとそこに鎮座するのみだ。きつちりとアイロンのかけられた白いシャツの襟元からは、白く長い首が覗く。練習しやすいように、サテン地のウエストコートは、いつもよりも緩く胴に巻き付いているようにみえる。細い腰から続く長い脚は、ダークグレイのパンツに包まれていて、軽く立てられた片膝が、布越しでも分かる、彼の体躯の華奢さを伺わせる。

「こんなほつそいのに、何であんな音が出るかな」

思わず出た言葉には、憧憬が混じる。

「きちんと練習しているからだ。お前と違ってな」

両目は閉じられたまま、彼がその薄い唇を開いた。

「うおっ！ お、起きてたのか、ヴァイオリン！」

「そもそも、休んでなどいない」

胡乱な目つきでヴァイオラを睨んでから、ヴァイオリンがカウチから上半身を起こした。片腕をカウチの背もたれにかけて、片膝を立ててこちらを向く彼は、まるで眠りから目覚めた天使のようではある。その目つきが、いやに鋭いことを除けば。

「え、でも、練習してなかったじゃんか」

「ちつ。これだから、馬鹿は。練習とは、音を奏でるだけではない。楽曲のリサーチ、和音分析、頭だけで出来る練習だって

たくさんあるんだ」

「そ、そっか」

そうやって、昼夜を問わず、楽曲のことを考えているヴァイオリンが可愛らしいだなんて言ったら、殴られるだろうか。無視されるだろうか。それとも、毒舌よりも更に毒にまみれた罵詈雑言を浴びせられるのだろうか。

「あ、これ」

「うん？」

片眉を上げて、ヴィオラが差し出したカップを見やると、ヴァイオリンは少しだけ目元を緩めた。

「ああ」

「ちよつと冷めたちゃったかもしれないけど」

言って、ヴァイオリンに手渡す。ふ、とヴァイオリンが微笑んだ。

「これくらいなら、大丈夫だ。そもそも、お前の作るコーヒーは、大概、熱すぎるからな。これくらいで丁度良いのかもしれない」

「あ、そうだったの？ 今度から気をつけるよ」

いつもよりもリラックスした雰囲気 of ヴァイオリンにつられて、ヴィオラも笑顔になる。ふたりして、何とはなしに窓辺でそよぐカーテンを見つめた。

「何、練習してたんだ？」

「バッハのパルティータ、ベートーヴェンのソナタ、ブラームス

のソナタ、ラヴェルのツイガーヌ、それから、パガニーニのカプリース」

「パガニーニ、何番？」

「は？」

「え、いや、だから、パガニーニのカプリースって24番あるじやんか。何番やってるんだ？」

「全部に決まっている」

「ええええ！」

難曲中の難曲としても名高いカプリースを、同時に全て習うだなんて、道理で練習し続けなければいけないわけだ。そもそも、そんな高度の目標を自分に課すところが、ヴァイオリンのヴァイオリンたるところかもしれない。

純粋に、驚きと、それから尊敬の念を込めて上げた声だったのに、ヴァイオリンは無下に顔をしかめると、

「大きな声を出すな、騒々しい。そんなに下卑た声で騒ぎたいのなら、僕の部屋を出てからにしてくれ」

「あ、ごめん。つか、すげえな、ヴァイオリン。ベートーヴェンは、全部ってわけじゃないだろう？」

「ゆくゆくは、全部やる」

「そっか。ヴァイオリンは、頑張り屋さんだよなあ」

なんとなくに言った言葉に、ヴァイオリンはコーヒーを口に含んでから、ややもったいぶった動作でカップをソーサーにおく。

いつも気になっているのだが、ヴァイオリンはカップをソーサーにおくとき、ちゃんと陶器と陶器が触れあう音を立てない。ヴァイオラは、何度やっても音を立ててしまうというのに。何か、こ

つがあるのだろうか。それとも、それすらも、練習あるのみののだろうか。

ヴァイオリンが、黒曜石に良く似た、きらきらとしていて、とてもなく深い瞳をこちらに向ける。そして、不敵に笑って見せた。

「僕を誰だと思っている」

いつも、傲慢にも思える自信に溢れたヴァイオリンを見ると、ヴァイオラは何だか元気が出る。ヴァイオリンは、頑張っているわけじゃないなんて言うかもしれないけれど、常に音楽に向き合っている彼を見ていると、ヴァイオラは嬉しくなってしまうのだ。傲岸不遜に微笑んで、いつも背筋をぴんと伸ばしていて欲しい。そのためなら、手動のミルだって挽く。何だって、出来る。そんな気持ちになる。

「うん」

歯を見せて笑えば、ヴァイオリンがまたしても顔を顰める。

「何だ、にやにやして。気持ち悪いやつだな。さ、僕はこれから練習だ。出てっくれ」

「うん。頑張ってな！」

「何度言わせる。練習は、頑張るものではない」

「うん！」

「お前……」

出来の悪い生徒を眺める教師のそれで、ヴァイオリンがカウチから立ち上がった。ヴァイオラよりも少しだけ背が高いのに、ヴァイオラよりも細いその身体は、しなやかに動く。無駄のない動きで、

ソーサーをヴィオラに差し出すと、ヴァイオリンはくるりと背を向けて、譜面台の方へと足を進めた。

「じゃあ、おれ、行くね」

「ヴィオラ」

扉を開けて、半身を通したところで、呼び止められる。振り返れば、ヴァイオリンが首だけをヴィオラに向けていた。

「なに？」

「コーヒー、ありがとう」

「どういたしまして！」

今度こそ、満面の笑みになって言うヴィオラを、気恥ずかしそうにヴァイオリンが見つめる。心なしか、耳が赤くなっていると思うのは、ヴィオラの気のせいだろうか。

「な、何をじろじろ見ている。さ、さっさと出て行け。練習の邪魔だ」

「うん！」

しっしつと振り払うその仕草も気にならないくらい、ヴィオラは幸せな気分で部屋を後にする。すぐに、閉じられた扉の向こうから、ヴァイオリンが奏でる音が聞こえてくる。

「がんばれ、ヴァイオリン」

小声で、扉の向こうに呟くと、ヴィオラはソーサーとカップを落とさないように、軽い足取りで自分の部屋に向かった。

甘い微笑みには気をつけて（前書き）

ヴィオラとチェロのお話。チェロがさわやか腹黒さんになってしまいました。

甘い微笑みには気をつけて

その日は、少しわくわくしていた。長い間、ソロ曲にかかりつきりになっていたヴァイオリンが、漸くヴィオラに招集をかけたからだ。ヴィオラだけじゃない。チェロも呼ばれた。

（弦楽三重奏なんて、久しぶりだなー）

うららかな日差しも相まって、ヴィオラの口元がつい緩んでしまふ。

（っと！いけない、急がないとなんだった！）

公私共に厳しいヴァイオリンであるが、リハーサルに遅刻するの
もされるのも大変に嫌う。どちらかというと、遅刻される方がも
っと嫌かもしれない。ただでさえ鋭い眼光が、レーザーのように
こちらを見つめるのだけは、避けたい。なんとしても。

「あ…れ？」

小走りに、道を駆けていると、ふと目の端に見知った姿が映った。
歩みを止めて、数歩下がる。建物の間の細い裏道に、ふたり、
ヴィオラのよく知る顔が並んでいた。

「チェロ？ それに、ピアノ？ 何やってんだよ、ふたりして」

狭いその道に入って行こうとすると、ピアノが顔を上げた。心
なしかいつもよりも青ざめた顔をした友人は、ヴィオラの姿を認め
るやいなや怯えた瞳をして、彼とは反対の方向へと裏道を走り去る。

「タイミング悪いよ、ヴィーちゃん」

表通りに比べて薄暗い路地の中、艶やかなチェロの瞳だけが光を放つ。走り去りながら、色んなものにつまづいているピアノの後ろ姿を、笑顔で見送ると、チェロが声をかけた。

「気を付けなよ、ピアノ」

「う、うる、うる、うる…さいつ！」

全く威厳の感じられない罵声が、消えゆくピアノの姿と共に霧散する。何だか居心地が悪くて、ヴィオラは空笑いを上げた。

「い、いやー、ごめん。何か、お邪魔だった？ おれ」

「ん？ んー、まあ、大丈夫。これくらいは、予測の範疇内だから」

ヴィオラにはまったく意味の分からないことを言っ、て、チェロがにつこりと微笑んだ。

「な、なら良いんだけど」

つられて、ヴィオラもへらりと笑う。家族とはいえ、チェロはたまに何を考えているか分からなくて、ヴィオラは焦るときがある。

「いま、何時？」

日常会話には不向きなほど甘い声でチェロが尋ねるので、ヴィオラは慌てて腕時計に目をやった。

「やばい！ このままじゃ、おれたち遅刻だよ。 どうする？ どうする？？」

「そっか。 そりゃ、やばいねえ。 ヴァイオリン、怒るだろうなあ」

「そうだよ！ 怒るなんてもんじゃないよ。 おれたち、命が危ないよ！」

両手をぶんぶん振って、事の重大さをアピールするヴィオラを、チェロは目を細めて楽しそうに眺めている。

「チェロー」

「ああ、ごめんごめん。 ヴィーちゃんは、いつもながら可愛いねえ」

「いや、おれ、可愛くないし」

「そう？ そんな、己の可愛さに無頓着なヴィーちゃんも、また可愛いね」

「チェロー！ 話聞してる？ とにかく、ここからダッシュしかないって。 それでも、間に合うか分からない感じじゃん？？」

一度、コーヒーを入れ間違えた時のヴァイオリンの瞳を思い出して、思わず背筋がぞつとする。 ぶるぶる、と恐怖心を取り除くように頭を左右に振って、ヴィオラは未だ余裕しゃくしゃくの笑みを浮かべているチェロを見上げた。

「とりあえず、走ろう！」

きびすを返して、いざ走ろうとすると、チェロが、

「あ」

「なーんーだーよー！」

「俺、楽譜部屋に置いてきたまんまだ。取りに帰らなきゃ」

「なっ！　そ、そんなことしたら、確実に遅れるじゃん！」

「うん。だから、俺は楽譜取りに戻るけど、ヴィーちゃんは先に行つてて？」

「そ、そんなこと……」

「だって、ここにヴィーちゃんが通りかかったのだって、ただの偶然でしょう？　別に、一緒にリハーサル行こうって言うてたわけじゃないし。これはそもそも、俺の責任なわけだし」

「そ、それはそうかもしれないけど」

でも、それって何か、おれがチェロを見捨てるみたいじゃないか。

困ったように眉根を寄せれば、チェロが菩薩のように柔らかい微笑みを浮かべてくる。その何もかもを許してしまう微笑みが、逆にヴィオラの罪悪感に拍車をかける。

「いー、いやいや！　だめだだめだ！　ここでおれが行ったら、チェロに悪い！　おれ、待つ！　だから、一緒に行こう。　な？」

「ヴィーちゃんは、本当によいこだねえ」

言いながら、チェロがぼんぼんとヴィオラの頭を優しく撫で、それからふにゃふにゃと髪を撫でた。

「でも……」

頭に手の平を載せたまま、チェロの声が少し曇る。メガネの位置を直して、ヴィオラが上目遣いにチェロを心配そうに見つめると、チェロは、これまた不必要に甘いため息をついた。

「ヴィーちゃんの申し出はとっても嬉しいんだけど、ふたりとも

リハーサルに遅刻しちゃったら、ヴァイオリンの怒りが噴火して、リハーサルどころじゃなくなっちゃうよね」

「は！」

大いにありえるチェロの指摘に、ヴィオラの顔が青ざめた。

「だから、やっぱりヴィーちゃんが先に行った方が……」

「わーかった！　じゃあ、こうしよう！　おれが、チェロの楽譜を取りに戻るよ。　チェロは先にヴァイオリンのところに行つてて？　ヴァイオリンのことだから、もうすでに苛々してると思うんだけど、チェロの方がヴァイオリンを宿めるの上手いじゃんか。　だから、チェロ、ヴァイオリンにちゃんと説明しておいてくれよな！　じゃー！！」

チェロの返事も待たずに、ヴィオラは全力疾走を始める。

「ヴィーちゃん！　鍵！　忘れてるよー！！」

後ろから、チェロの良く通る声がして、ヴィオラは急ブレーキをかけた。　鍵を手にして、ぷらぷらと上方で揺らしているチェロのところまで戻ると、チェロが人好きのする笑顔で言った。

「ヴァイオリンのことは、任せておいて？　ありがとっ、ヴィーちゃん」

「どういたしまして！」

ひとに感謝されることをするのは、気分が良いなあ。　そんな脳天気なことを思いながら、ヴィオラはチェロのアパート目がけて走り続けた。

「遅い！」

「ひい！」

あまりの剣幕に、思わず悲鳴が出てしまう。 ヴィオラは、はあはあと息を切らしながら、ヴァイオリンの殺人的な視線ビームにさらされ、席にもつけずにただひたすら怯えながら立ち尽くした。 チェロから説明聞いてないの？ などと言えるような雰囲気では、決してない。

「遅い！ 一体何度言えば分かる？ 遅刻するな。 そんなに難しいことなのか、それは」

鬼教師のそれで、細い腰に両手をやり、ヴァイオリンがヴィオラを睨む。 目が合ったら、気絶してしまうかもしれない。 そんな不条理なことを思わせる両の瞳から、ヴィオラは必死に目を背けた。

「ご、ごめん」

それだけをやっと絞り出すと、盛大なため息をつかれる。

「お前、やる気あるのか？」

「あ、あるよ！ 全然あるって！ ていうか、今日のリハーサル、めっちゃめっちゃ楽しみにしてたんだから、おれ！」

「ふん」

反射的に声を上げたヴィオラを、面白くなさそうに、でも興味深

そつに見てから、ヴァイオリンが軽く鼻をならす。

「時間の無駄だ。さっさと始めるぞ」

言われて、ヴィオラは定位置に座る。左隣に座っていたチェロをちらりと見れば、いつもの優しい笑みを浮かべたチェロだった。

「ちえ、チェロ？」

「んー？」

「あの。さ。ヴァイオリンに、ちゃんと……」

「ああ。ごめんね、ヴィーちゃん。俺がついたときには、ヴァイオリンすでにお怒りモードだったからさ。言うタイミングなくしちゃって」

「そ、そうなんだ……」

「ごめんね？ 怒ってる？」

「いや、怒ってないけど……」

「そう。ヴィーちゃんは、よいこだね。ありがとう」

何か。何かが、おかしい。そう思うのだけれど、何がどうおかしいのと言えない。言葉に窮するヴィオラをよそに、チェロはさっさと楽譜を受け取ると、ヴァイオリンとヴィオラに向けて甘い笑みを向ける。

「さ、始めようか」

何か。何か、おかしい。

おれ、何か、騙された気がする……！

ヴィオラの内なる声は、リハーサルという名目で沈黙せざるをえないのだった。

君をさがして右往左往（前書き）

コントラバスお披露目話。

のはずが、チエロやらチューバやらも参戦。

君をさがして右往左往

シューベルトの鱒をやる。

そう、ヴァイオリンが宣言したのは、つい数時間前のことだ。

時としてもものすごく直感的に行動するヴァイオリンに呼びつけられたと思つたら、開口一番それを言い渡された。

「鱒？」

「鱒だ」

大まじめに言うヴァイオリンの顔を見つめながら、すでにヴィオラの頭の中には鱒のメロディーが流れてくる。

「鱒かあ……」

夢見心地に呟けば、顔面をぺしりと譜面で叩かれた。ヴァイオリンが、呆れた顔をして嘆息する。怒っているわけではないのは、ヴィオラが音楽のことを考えていたからだろう。地面に落ちてしまつ前に拾つた譜面を手に、ヴィオラがヴァイオリンを見上げると、彼は、

「みんなのパートだ」

「おれに、配って来いと？」

その傲岸不遜な命令に、少しだけ、ほんの少しだけ勘に障るものがある。が、ヴァイオリンがきょとんとこちらを見つめ返すのに、すぐにその思いは消え去ってしまう。

そうだった。相手は、ヴァイオリンなんだった。王子に、庶民

の何とやらを説いても意味がないように、ヴァイオリンに人使いが荒いなどと嘆いても、のれんに腕押しだ。下手をすると、そののれんに反撃されかねない。

「分かったよ」

諦めと、やる気を半々に含ませて、ヴィオラが立ち上がる。ヴァイオリンは、うつすらと笑みをたたえたまま、ヴィオラに一步近付いた。その華奢な指をヴィオラの肩に置くと、

「良い曲になるぞ」

「だな」

ヴィオラも笑顔で応え、珍しく上機嫌のヴァイオリンの元を去った。

もともと、引きこもり体質で、滅多に部屋から出てこないピアノをつかまえるのに、そうそう苦労はいらなかった。ノックしたドアを開けてくれたピアノの顔が、異常にやつれてみえたのが怖くて、思わずヴィオラは顔色の悪い友人に夜食を作ってしまった。腹持ちが良いように、身体に優しいものを、とミルク粥を作ってやれば、ピアノの大きな目がうるうるし始める。

「お、おい。ピアノ。泣いてるのか？」

「泣いてない！ 湯気が目に沁みるんだ！」

「そ、そうなのか……？」

ピアノの部屋にはいつも大量の楽譜が積み上げられている。嫌
と言えないこの友人は、次から次へと、アンサンブルや伴奏の依頼
を受け付けてしまい、結果として己の首を絞め続けている。年が
ら年中ストレスを溜めっぱなしなのに、どうやら、弾くのをやめる
気にはならないらしい。

この百科事典ほどの厚みのある楽譜の山に、更に曲を追加するの
かと思うと心が痛んだが、このまますごすご帰っても、ヴァイオリ
ンに何と言えば良いのか分からない。板挟みに苦しんだが、結局、
ヴィオラは鱒の楽譜をピアノに差し出した。

「これは？」

「鱒。ヴァイオリンが、やりたいんだってさ」

「へえ！ 良い曲だね！」

ぱつと顔が明るくなると、ピアノはまだ食べかけの粥を片手に、
もう片方に楽譜を受け取り、いそいそとそのページを開けた。

「ああ、良い曲だねえ。名曲だよねえ」

「やってくれんのか？」

「何言ってるのさ。こんな名曲目の前にして、断れるわけない
でしょう」

「ありがとな、ピアノ！」

そんな風に色々引き受けちゃうから、後々大変なことになるので
は？などという思いがちらついたが、あまりにも純粹に笑うピアノ
を見て、ヴィオラはなるたけ柔和な笑顔を返す。

そんなやりとりがあったのが、かれこれ3時間ほど前になる。

「どこ行っただよー」

チェロとコントラバスが見当たらないのだ。一応、ふたりの部屋を訪ねてみて、30分ほど待ってみたのだが、収穫なしだった。携帯にもかけてみたが、どういうわけか、ふたりとも圏外にいたみたいである。

「うう、暗くなってきたし……。おなかすいてきたし……。でも、楽譜渡さないと、またヴァイオリンに叱られるし……。チエロ。コントラバスー。どこに行っちゃったんだよう……」

つつい半泣きになってしまふヴィオラに、近付く影があった。

「ヴィオラ？ 坊じゃないか。何してるんだ、こんな夜遅くに」

良いこは、おうちに帰っていなきゃだめじゃないか、とでも言いたげなその野太い声は、しかし、ヴィオラの聞き知る声だ。

「チューバ……」

やっと、見知った顔に出会えた安堵感で、つい涙ぐみそうになる。チューバは、そのがっしりとした手をヴィオラの頭の上に置いて、がしがしと撫でてくれた。

「どうした？」

「チェロとコントラバス探してるんだけどさ……」

「ああ。 あいつらなら、いつものところにいるんじゃないか？」
「いつものところ？」

あまりにもあっさりとチューバが言うものだから、涙も引っ込んでしまう。 ヴィオラは期待に溢れた瞳をチューバに向けた。

「つて、どこ？」

「ほら、その角を曲がったところに、バーがあるだろう。 地下に降りていく階段があるところ。 そこにふたりしてたむろってるんじゃないのか？ あそこは、コントラバスの行き付けのバーだから」

「ば、バー……」

何て大人な響き。 ごくり、と生唾を飲み込めば、チューバが人好きのする豪快な笑い声を上げる。

「大丈夫だよ。 コントラバスとチェロがいるところだ。 取っ喰われたりしねえって。 な？」

「お、おう……！」

精一杯強がって返事をする、チューバは満足そうに二、三度ヴィオラの肩を叩いた。 それから、にかつと頼りがいのありそうな笑みを向けて、

「じゃあな、坊。 グッド・ラック！」

迷いのない歩みで、ずんずんと遠ざかるチューバの背中をしばし見つめて、ヴィオラは自分に渴を入れる。

「っしゃー！」

いざ、参らん！ バー！ 大人の階段！

意味不明なことを心の中で唱えながら、ヴィオラはチューバの教えてくれたバーへと足を踏み入れた。

薄暗い照明の中、ちらほらと人影が見える。思っていたよりも煙草臭くなくて、もしかしてここは禁煙バーなのだろうか、などと馬鹿なことに思いを馳せる。カウンター席に並んで座った人影に、ヴィオラは安堵のため息を盛大に吐いた。

「おや？ヴィーちゃん」

チェロがこちらに気付いてくれて、気さくな笑顔でヴィオラを招いてくれる。ぎこちないながらも、カウンター席に座ると、ヴィオラは早速楽譜を取り出そうとした。が、

「ヴィーちゃんは？ 何飲むの？」

「え？ お、おれは、アルコールは……」

「何言ってるの、ここ、バーだよ？ 来たら飲まないといけない、バーだよ？」

「ええ！ そ、そうなのか？ 飲まないといけないのか？」

「そうそう。飲まないよね、法律違反なんだ」

「ほ、法律違反！ いや、でも、おれ、あんまり飲まないから」

「じゃあ、俺が選んであげようか。 そうだなー。 あんまりお酒に慣れてないんだったら、テキーラのショットなんてどう？」

「て、てきーらのしょつと？ そ、それ、初心者向け？」

「初心者も初心者、大体のひとはテキーラから始めるよってくらい、初心者にお馴染みの飲み物だよ」

「そ、そうなのか……」

微塵もチェロを疑おうとしないヴィオラを、チェロは至福の表情で眺めている。初心者にはハードルが高すぎるだろう飲み物を、ヴィオラが頼もうとしたときだった。

「パナシエをひとつ。こっちの坊やに」

くぐもった空気を、地震のように震わせる声がして、ヴィオラの飲み物がオーダーされる。チェロは途端に唇を尖らせて、隣に座った寡黙な兄妹を睨み付ける。

「コントラバス！ どうして邪魔するの」

「邪魔じゃない。ヴィオラを誑かす、お前が悪い」

「え？」

ことの成り行きがいまいち掴めなくて、ヴィオラが首を傾げると、チェロは「あーあ」と大きく伸びをして、残念そうにヴィオラに視線を送った。

「ヴィーちゃん。テキーラは、初心者向けの飲み物じゃないよ」

「え？ え？」

「パナシエなら、大丈夫だ」

からん、とコントラバスの手にしたグラスの中で、氷がぶつかり合う音がする。深い琥珀色をした飲み物を口にして、コントラバスはやっとヴィオラに目だけを向けると、微笑した。

「あ、ありがとう……」

コントラバスは、いつも優しい。あれやこれやと世話を焼いて

くれるわけじゃないけれど、いつもここぞというときには、傍にいてくれる。兄のような、父のようなコントラバスの前では、ヴィオラはいつも自分がとてもなく子供のように思える。コントラバスの親切はいつも的を得ていて、それが嬉しいのだけれど、同時に何故かとても気恥ずかしい。

「なに、なに。何でヴィーちゃんたら、頬染めてるの？何でそんな可愛い声でありがとうとか言っちゃってるの？」

チェロのやつかみが終わるのを待つて、コントラバスが口を開く。

「どうした？俺たちに、何か用か？」

「あ、ああ、そうだった！これ……」

言うてから、カバンの中をこそごととしてみると、カウンターの反対側から飲み物がヴィオラの前に置かれた。

「とりあえず、飲んでみる」

ゆっくりと瞬きをして、伏せ目がちに言うコントラバスの言葉通り、ヴィオラは素直にグラスを手にする。こくりと飲み込んだその飲み物は、アンバー色をしていて、少しだけ弾ける炭酸と柑橘系の後味が、歩き回った身体に程よく染み渡る。

「うまいだろ」

喉の奥で笑いながら、コントラバスが片眉を上げる。

「うん」

「だからって、一気に飲むんじゃないぞ。アルコールはアルコ

「ルなんだからな」

「うん」

諭されるようにして、ヴィオラはゆっくりと一口を飲み込んでから、カウンターにグラスを置いた。カバンの中から、チェロとコントラバスのパートを取りだしてから、ふたりに差し出す。

「ん？新しい曲？」

チェロが手にして楽譜を、目を細めて見る。この薄暗い中では、実はあんまり良くないチェロの視力は役に立たないのかも知れない。

「鱒、か」

「ヴァイオリンが。やろうつて」

「良いね。良い曲」

チェロが微笑めば、コントラバスも、

「面白い」

乗り気みたいだ。

「うん」

夜遅く、歩き回った甲斐があるかもしれない。ヴィオラは、漸く満足して、グラスに手を伸ばした。

勇ましき乙女に勝つ術はなし（前書き）

外道だー邪道だー腐ってるーなどと言われるかもしれませんが、この楽器擬人化では少々BL要素を入れていこうと思っています。

登録した際にもそう書いておいたので、ここに来られた方は、もれなくそういう準備が出来ていらっしやいますよね？

では。

ちよいと、フラグを立ててみました。

弦楽器もあともうひとりで全員揃います。好きなカップリングをお楽しみくださいませ。

勇ましき乙女に勝つ術はなし

「貴方たち、どれだけのろまでとんまで愚鈍なの」

開口一番、そう言われた。ちなみに、まだヴィオラもチェロも、足を一步も部屋に踏み入れていない。ドアノブに手をかけて、ドアを開くと同時に罵声を浴びせられた。

「いつもながら、手厳しいねえ。ふわあ……」

あくびをしたせいで涙目になりつつ、チェロが言う。もっとも、その内容に反して、口調と顔からは微塵も気にしている態ではなさそうだが。

「あくびをしないで！」

「なーんで？」

柳眉を釣り上げて、ついでに声にも鋭さを付け足して注意をされても、チェロは穏やかな笑みを崩さない。

すげえなあ、チェロは。

他人事のようにヴィオラは感心する。

「何故って。そんなことも分からないの？ 呆れた知能指数の低さね。お兄様も、さぞかしお困りでしょうに。貴方たちのような、動きものろければ頭ものろい、役立たず過ぎるひとたちの面倒をみさせられて、お兄様がお可哀そう！」

大袈裟に目の縁を人差し指で拭き取る仕草を見ると、これまた大仰に手のひらで顔を覆ってみせる。

「えー。でも、ヴァイオリンって、意外と出来ない子だよな」

チェロの不用意な一言に、彼女、第二ヴァイオリンは今度こそまなじりをきつと吊り上げた。

「なんですって!」

「ねえ? ヴィーちゃん?」

「なんで、そこでおれに振るかな、チェロ!」

第二ヴァイオリンの視線が怖くて、ついついチェロに隠れつつそう言つと、チェロはまたしても悪意の感じられない笑顔で、

「だって、ヴィーちゃん、よくヴァイオリンの世話してるじゃない?」

「……なんですって?」

第二ヴァイオリンの声が下がった。と同時に、部屋の温度も下がった気がする。兄である第一ヴァイオリンそっくりの、絶対零度の視線で、ヴィオラはすでにここに来た目的を見失い始めていた。単刀直入に言えば、逃げたい。ものっそ、逃げたい。

「い、いや! おれ、おれなんて、全然。全然だって! ヴァイオリンの世話なんて、そんな大層なこと、出来ないよ。おれがやってるのなんて、すずめの涙みたいなもんだし」

恐ろしすぎて、彼女と目が合わせられない。一体どういう顔で、ヴィオラのことを聞いているのだろう? 気にならないといえば嘘になるが、それ以上に、本気で恐ろしい。

「分かれば良いんですけど。そもそも、貴方ってひとは」

「そのへんでやめておけ、ツヴィ」

「お兄様！」

最後の！は完全にハートマークがついていたと思われる。さきほど低くなった声も、瞬時に甘い声に変わる。

いつからそこにいたのか、というか、今まで何をしていたのか。お気に入りのカウチに彼にしてはリラックスしたいでたちで半身を預けているヴァイオリンは、やれやれと億劫そうに立ち上がった。す、とそこへ背筋を伸ばして立てば、たちまち、

「はあん！ お兄様、素敵！」

と第二ヴァイオリンは、倒れそうになる自分の体を、壁に手をついて支えた。

「相変わらず、ヴァイオリンのフェロモンはただ漏れだねえ」

「お前に言われたくない。年中誰かれ構わずべたべたしている節操無しが」

「やきもち？」

「そのおめでたい脳みそ、一度どこかでメンテナンスに出してもらえば良い」

「じゃあそのときは、ヴァイオリンも一緒にね」

にこにこ相好を崩さないものの、ヴァイオリンの辛辣な言葉に負けない受け答えをするチェロに、ヴァイオリンが目を細める。

ヴィオラなら、その視線を受けただけで硬直してしまいそうなものだが、チェロは神経の太さが違うらしい。フレンドリーとしか形容出来ない完璧な笑顔をたたえたまま、白い歯を見せる。

「で？ 今日、おれとヴィーちゃんを呼んだ理由は？」

「しと」

「大丈夫ですわ、お兄様！ お兄様がその麗しいお声を煩わせませんとも、私がこのうすのろ昧者どもに、私がお兄様に代わって説明いたします」

言いかけた言葉を遮られて、しかも熱の籠った言葉でたたみかけられて、ヴァイオリンは少し気押されたか、ぱちぱちと瞬きをしてから神妙に頷いてみせた。満足そうに微笑んで、第二ヴァイオリンがくるりとヴィオラとチェロに向き直る。気高い頬笑みを浮かべる第二ヴァイオリンは、そうしていればとても高貴な者に見えるというのに。それを台無しにする見下し笑いで、彼女は一言だけ。

「死と乙女」

「カルテット？」

「それ以外に、なにがある？」

「だって、リートもあるし、小説も映画も、それに絵画だってあるからさ」

「くっ！ 何て生意気なの、チェロ！」

「それは、おれに、それはこっちの台詞だよ、とか安っぽいこと言わせたい釣り？」

「ああもう、チェロもツヴィもやめなよ！」

第二ヴァイオリンの眼に殺意が籠り始め、チェロの鷹揚な笑みが震えているのをみてとって、ヴィオラが慌ててふたりの間に割って入った。

「ほら、チェロもさ。ヴァイオリンが折角おれたたちのこと呼んでくれたんだからさ。死と乙女、名曲じゃなか。ここは素直に喜ぼうよ」

ふーとこれ見よがしなため息をついて、チエロが一度目を閉じた。ゆっくりとそれを開くと、チエロの目の前でおろおろしているヴィオラをぎゅっと抱き締める。

「えええ、ちよつと、チエロ！」

「ヴィーちゃんは良い子だねえ。ツヴィに爪の垢でも煎じて飲ませてあげたいよ。どうしても違うかなあ。ツヴィ、ヴィーちゃんとよく曲中では組んでるのにさ」

「共通の目的があるからです。お兄様を引き立てるといって……、お、お兄様？ どうされました？」

「……ん？」

いつものヴァイオリンらしくない、心ここにあらずといった風に、ヴァイオリンが生返事を返す。

「チエロ」

「なあに？」

「離れろ」

「誰から？」

「それに決まっている」

それ呼ばわりされたヴィオラは、腕に込める力を強くしたチエロから逃れようともがいている。

「ヴィーちゃんのこと？」

「離れろ」

「どうして？」

「リハーサルを始めるぞ」

にやにやと興味津津の顔のチェロにきびすを返すと、ヴァイオリンは冷たい声音でオーダーを出し始める。

「ヴィオラ。譜面台の用意を。チェロ、椅子を定位置に置き。ツヴィ、楽譜を」

「はい！」

嬉々として第二ヴァイオリンが動き始める。まだ動こうとしないチェロと、動きたくても動けないヴィオラに侮蔑の視線を送ると、

「ほらほら。貴方たちが救いようのないお莫迦さんだってことは分かったから、さっさと用意をしてちょうだい。まさか、お兄様の確なオーダーが理解出来なかったわけではないんでしょう？」

「手厳しいねえ」

どこか楽しそうに呟くチェロを見上げて、ヴィオラは情けない声を上げた。

「チェロー。いい加減、解放してよ」

カルテットのことと頭がいっぱいになってしまっていたヴィオラには、カウチで苛立ちを紛らわせようとしているヴァイオリンの姿は、目に入っていないかった。

花びら浮かぶは湖の瞳（前書き）

弦楽器ラストを飾るのは、ハープです。

活動報告の方で詳しく書くつもりですが、ハープのイメージ声優さんは、下野紘さん。ふにゃん、と少し抜けた可愛らしいハープ。うちでは、フルートとできている設定になっています。

花びら浮かぶは湖の瞳

「お、いたいた」

思わず、口元がゆるむ。満足したねこの口で、ヴィオラが誰にともなく独りごちた。

今日の探し人は、見つけにくいことこの上ない。

決して、凡庸な容姿などではない。むしろその逆で、とても人目につく容姿をしているにも関わらず、何故か集団に紛れやすい。集団からはみ出ることもなく、突出することもなく、しかして、無視されるわけでもない。

気付けばいなくなっていた。それが、今日の探し人である。

そんなわけで、他の誰に聞いても、行方を知らない。そういえば今朝見かけた、そういえば昨日はどこそこにいた、なんて情報が得られるだけで、ちつとも現在の情報が掴めない。いや、厳密に言うとなら、それら全てを把握しているものが一人、いるにはいるのだが。その彼を捜すのも一苦労だったので、ヴィオラは結局、街をうろつくと歩き回って今に至る。

当の本人はといえば、花束を片手に、ふわふわと妖精のような足取りで石畳の路地を歩いていた。

「ハーブ！」

後ろから声をかける。口元にメガホンのように手をつけて、なるだけ響く声で。

なのに。

「あ、あれ？」

他の通行人がヴィオラの声に反応する程度の声量だったはずなのに、呼びかけられた本人は、先程と変わらず、ほわんほわんと歩き続けている。

「は、ハープ！」

もう一度、今度こそは大声で、肩につくかつかないかのブロンドをきらきらと輝かせているハープの後ろ姿にぶつける。

これで振り向いてもらえなかったら、走って追いかけるしかない。そう心の中で決めておいてから、ヴィオラは浮世離れたハープの背中を見つめた。

ヴィオラの声は、風に乗って、石畳の路地を飛んでいったらしい。そう広くはない路地の両脇に細長く伸びた建物、透き通った空に繋がっている。ふと歩みを止めて、ハープが顔を上げた。さら、とブロンドが肩に触れるのが見て取れる。音の風をしばらく眺めてから、ようやくハープが肩からヴィオラの方へと向き直った。

「あ」

お世辞にも通る声とは言えないが、代わりに、天上の歌声もかくやとばかりの声でハープがヴィオラの姿を認めて微笑んだ。

「よー」

その場に立ち尽くしたまま、こちらへとは向かって来ないハープのおっとりさには慣れている。ヴィオラは、駆け足で近寄ってから、

顔をほころばせた。

久方ぶりに見るハーブは、相も変わらず、爪の先まできらきらと
している。整えられた調度品のように輝くブロンドはさらさらと彼
が首を傾げるたびに揺れ、透き通る湖色の両の眼は見つめる相手の
心を映す水面のごとく。きつちりと第一ボタンまでかけられた白い
ブラウスに、ベルベットのリボンタイが映える。

「ひさしぶり。元気？」

心地良い声でハーブが尋ねる。

「おう、元気だぞ。ハーブは？　元気か？」

「ぼく？　うん、そうだね。元気といえば、元気かな」

言葉とは裏原に、長い睫毛を伏せて顔を俯かせるハーブは、女の
子であるツヴィの何倍も儚げに見える。なんて言ったら、色んな方
面からたこ殴りにされるかもしれない。そう思って、ヴィオラは個
人的な感想を、個人的な感想のままに留めておくことにする。

「どうした？　元気とかって言うてる割には、なんか暗いけど」

「うん……」

ふう、と甘いため息をつくハーブは、物憂げな横顔で視線を上げ
る。

「フルートにね。最近、会えてなくて」

意外と家族意識の強い弦ファミリーにおいて、この少し変わった
遠縁は、木管ファミリーのフルートとひどく親しい。それはもう、

色んな噂が立つくらいに。

「会えて、ない」

「そう。なんだったつけ。木管アンサンブルだとか何だとかがあるんだって。つまらないよね。その間、ぼくはフルートに会えないんだもの」

まるで恋人との関係を憂う口調を揶揄したかったのに、ハープはますますアンニュイな顔つきになった。ひく、とヴィオラの口元がひきつる。

「ちなみに、最後に会ったのは、いつ？」

何故、そんなことを聞くのだろう。自分自身に聞いてみたい。が、それももうあとの祭り。聞いてしまったものは、仕方がない。ハープの答えは、うっすらといていた予感を、はつきりとした現実へと変えてしまう。

「今朝」

「け、今朝？　って、今朝？　今日の朝？」

「うん。朝は、フルートと一緒に過ごすって決めてるんだ、ぼく」

天使のような純朴さで言い切られると、後光が差しているようにも見える。ヴィオラは眩しいものでも見たかのように目を細めて、わざとハープから視線を逸らせると、乾いた笑い声を上げた。

「そ、そつか。ははは……。今朝ね……。毎朝ね……」

何か、とんでもないことを聞いてしまう気がする。いやいや、気のせいだ。気のせいに違いない。毎朝、同じひとと一緒に時間を過

「ごすなんて、そんなの、普通に決まっている。みんなしていることだ。きつと、そうだ。そういうヴィオラは、毎朝、ひとりで起きているけれど。ヴァイオリンを起こしにいくことはあっても、チェロに起こしてコールをもらうことがあっても、毎朝会うなんてことはない。けど。きつと、それは、ヴィオラが変わっているからなのだ。」

無理矢理、自分をマイノリティーに仕舞い込んでから、ヴィオラはぶるぶると首を振って気分を切り替える。

「あ、じゃあさ。今日のニュースは、ハープにとっては嬉しいものかもよ」

「じゃーん、と擬音語を口にしながら、楽譜を取り出す。」

「ドビュッシーのソナタ。ハープとおれと、それからフルートのメンバーなんだぜ。フルート、今は忙しいのかな？ だったら、ハープの方からフルートに楽譜渡しておいても良かった？ で、ハープとフルートに都合の良い日があったら教えてよ。おれ、それに合わせられるからさ」

「てきばきと、楽譜の中からハープとフルートのパートを抜き取り、持参していたファイルにそれらを入れると、ハープに手渡そうと差し出す。」

「知ってる？ この曲。他のソナタに隠れて、あんまり知られてないかもしれないんだけどさ。めちゃくちゃ名曲なの」

「と、ここまで語ってから、いつまでたっても差し出した楽譜が受け取ってもらえていないことに気付いた。」

「ハープ？」

頼りなげな瞳は開かれたまま、華奢な首に支えられた顔はこちらを向いたまま。しかし、その薄い瞳は、ヴィオラのことを見てはいない。何故か、それだけは瞬時に理解出来た。

「おい。ハープ？ ハープー？？ おーいってばー」

数度と言わず何度も呼びかけて、諦めようかと思った矢先。このまま声を上げていれば、自分だけが変質者のように思われるのではないだろうかと思念したところだった。

「あ。え？ なに？ ごめん、聞いてなかった」

「いや、聞いてなかったのは、めちゃめちゃ分かってたけどさ」

「え？ なに？ 聞こえなかったよ」

「いやいや、今のはただの独り言」

そうだ、そうだった。久方ぶりに会うから、久しぶりにこの天使の容貌を見たから、ころつと忘れていたけれど、ハープのマイペースっぷりはヴィオリンが青筋を立てるくらいだったのだ。だからこそ、ヴィオラがこうしておつかいに出されているのだ。ツヴィはヴィオリンのところを離れようとしないうし、チェロはハープが話を聞かないとなると容赦なく無視してしまいそうだし、ダブルベースではハープが怯えかねない。

ハープは、無邪気な笑みを浮かべて、ひとり苦笑するヴィオラを眺めている。こほんと空咳をしてから、ヴィオラは頭を掻きつつ、

「ごめんごめん。これ。今度、一緒にやろうよ。フルートも一緒にさ」

「フルートも？」

ぱあっと周辺が明るくなったような錯覚を覚える。

フルートの単語に、ハープの顔色が途端に明るくなる。すべすべのほつぺたに紅を差して、相好を崩す彼に、ヴィオラは持っていた楽譜をもう一度差し出した。

上目遣いにヴィオラを見つめて、ハープが手にしていた花束を代わりに差し出した。

「これ、お礼に。あげるね」

ヴィオラが花束を受け取ると、ハープは両腕をクロスさせて胸の前で楽譜を抱いた。目を閉じて、楽譜にキスをするように顔を近づける。そして、花がほころぶような笑みを見せる。

「ありがとう、ヴィオラ。今日、ちよつと落ち込んだの。夕方までフルートに会えないから。でも、ちよつと元気出たよ。これ、フルートのパートはぼくから渡しておくからね」

じゃ、と片手を挙げると、もう一度両手でしつかりと胸に楽譜を抱いて、ハープがきびすを返す。手を振りながら別れの言葉を口にするヴィオラを後ろに、ハープはまた、ふわふわとどこかおぼつかない足取りで路地の人混みの中に消えていった。

「かわいいなあ、ハープは」

思わずそう口にしてしまった、ヴィオラははっと口を押さえた。今のをフルートあたりに聞かれたら、阿鼻叫喚の地獄絵図が待っている。きよろきよろと周りを見回して、フルートの姿がないのを見てから、ヴィオラははっと息をついた。

「さ。おれは帰って、こいつを花瓶に入れてやらなきゃな」

くるりとハーブが行った方向とは逆に歩み始めながら、ヴィオラは鼻を動かして花束の放つ香りを吸い込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1533n/>

君が奏でる音をさがして

2010年11月18日02時58分発行